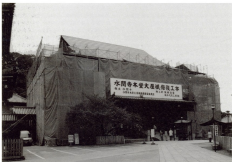


テンプス

TEMPUS

3号



水間寺は岡崎市の貴重な文化財として観光名所にもなっています。また、昨年度からおこなわれている専門調査では重要な発見も多くありました。現在、この貴重な文化財を後々まで伝えていこうと、屋根瓦の全面葺き替え工事中です。

※テンプスとはラテン語で時を意味します

埋蔵文化財発掘調査成果

1. 海軍造幣発掘調査概要

今回の発掘調査は、建物遺跡予定地内に、282㎡の調査区を設定して行いました。

調査地は工事の跡地であるため、建物の基礎によって土層が一部破壊されていました。良好な遺物包含層（土層片を含む土層）が埋藏していました。調査区内の地形は南西側から北東側に向かって段立状に3段になって下がっています。遺物包含層は、盛土、耕作土の下に最上段には3層、2段目に4層、最下段では3層埋藏していました。盛土内からは戦時中前後の陶磁器が多く出土しています。

遺構は最上段、全段目の各遺物包含層上面において近北から中北の遺構を出土しました。遺構は段の層に対して平行に走っているものと、直交しているものがありました。遺構の方向は、各面でほとんど変わらず、長時間にわたってこの地を農地として利用していたことがわかります。農具用として使用されていたのかは不明ですが、水田施設と考えられる近頃の土坑が調査区の中央で見つかりました。

最上段において遺構①と、遺構②、土坑などを検出しています。遺構①はすべて調査区外に拡がっているため範囲は確認できませんでした。遺構②は調査区の西側で検出し、南から北に向かって走っています。遺の断面には鉄の跡であろうと考えられる小さな穴が確認されています。鉄穴は遺の直の両側に約1mの間隔をおいて存在し、一定の間隔で掘んでいます。この状況からは、人為的に穴を取ったのか木片は全く崩土していませんが、おそらく木の杭が打ち込まれていたと考えられます。どのような目的で杭が打ち込まれていたのかは不明ですが、杭の上に物を架けていた可能性があります。遺の中から主に瓦器（表面に灰が付着した器）、土師器（遠浅きの器）、中国製の白磁碗などの遺物が出土しています。これらの出土した遺物から中世につくられた遺物であると考えられます。調査区の南西側を水田利道が東から西に向かって通っていますが、遺①の存在から街道の位置が変わっ

た可能性が考えられます。

遺②と遺③は調査区の南東から北西に向かって走っており、調査区の中央部で重なり合っています。遺③から遺①の出土遺物と同層の中世の時代に使用されていた器の破片が出土しています。遺③は断面観察によって遺③より古い時期になると考えられます。遺③からは瓦じりとして使用されていたサマカイト片（石器の材料）が出土しています。時期は縄文時代のもので弥生時代のものも出土しています。掘入した可能性もあり、遺物も少ないためその時代のものであると確定はできません。むしろ、調査区の中央部で遺②に隣接する土地があり、両者は共に関連するものと考えられます。土坑からは鉄器（灰色の硬質の器）の遺とみられる破片が出土しており、時期的には遺③は中世につくられ、遺③は奈良時代につくられたと考えられます。

今回の調査でこの地域では農耕を営んでいたことがうかがえる成果を得ることができました。3本の遺は農灌漑の水路として使われていたか、新田を区画していた溝である可能性が考えられます。柱跡を確認することはできなかったため、建物があつた可能性は低いと思われれます。断面を段立状につくりかえ、築造物を建てることなく高い農灌漑地として利用していたと推察されます。



2. 東遺跡で発見した動物の骨を捨てた穴

今年1月にひとつの発見がありました。昨年11月より実施していた東遺跡の発掘調査において、牛、馬などの動物の骨を捨てた中世（室町時代）の穴が見つかったのです。中世のこのような穴の発見はとても少なく貴重なものです。

穴は3つあり、一番大きなものは直径約4mもありました。当時使われた網（瓦葺羽置）、籠り鉢（瓦葺籠り鉢）などの生活道具も一緒に捨ててあるので、骨埋めの捨てた穴とは想定できません。しかし、最終的に埋めた方法が穴を封じた形になっているので、通常のゴミ穴と区別されていたことは確かです。捨てられている動物は牛が最も多く、その次が馬です。その他、鹿、猪、鳥の骨、犬の骨が少量出土していますが、ほとんどが牛、馬です。骨は腐りかけているので観察が十分にできないのですが、皮を剥いだ跡や骨髄を取り出した跡が確認できるので、当時の人々が動物にこのような作業を行っていたことが窺えます。

この調査では、近世（江戸時代）の動物の骨を捨てた穴も発見しました。その中で、犬、猫の骨を捨てるための専用の穴が2つありました。最近、犬、猫を飼ったことのお古文書が発見され、このこ



とを証明する発見となりました。その他、中世と同様に牛、馬の骨も捨てている穴などがみつかっています。

動物の骨を捨てた近世の穴などは各地で発見されていますが、先に書いたとおり、中世のものはとても少なく、更に、中世から近世にかけてのこのような穴が発見された例は稀無に等しいことです。今回の発見は、古文書では分からない当時の動物に対する人々の具体的な活動や時代の流れの中での変化を知る上で貴重な成果となりました。



2-1-10000

市内文化財紹介 安養寺の銅造 双盤

貝塚市郷土資料館では、平成7年度から個別の歴史資料についてより詳しく検討するために文化財専門調査を実施しています。平成9年度は本島地域から近畿地域にかけて調査中ですが、その中から今回は、名物の安養寺の銅造双盤（どうぞうそうばん）についてご紹介します。

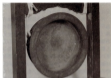
安養寺は、現在浄土宗知恩院本で、和泉地方の円光大師二十五霊廟の第一霊札所です。永正9年（1432）、應永上人（とうよしょうにん）によって創設されたといわれています。当時和泉地方は勧修寺である天台宗知恩寺や高野山中興寺等といった真言系寺院が多数を占めていました。そのような中で興って活躍していた應永上人は、浄土宗の教義拡大のために各地を巡遊（じゅんしやく）して多くの寺の建立に関わりました。近畿では、香木の西福寺、佐野の上善寺などを開山とされていますが、このなかを結ぶ大難所道沿いに安養寺は創設され、同時に上善寺の住職の位牌が数点安置されていることから、應永上人開基の伝承はうかがえます。

さて、このような安養寺には念仏信仰の発願として、源平の十夜を中心として夜念仏が営まれ、双盤を打ちながら鐘杵の鐘回りで念仏を唱える双盤念仏や、大念珠をくりながら念仏を申すいっせいの夜念仏行事が行なわれています。

今回紹介する双盤は、外径48.8cm、内径32.8cmのもので、大坂高津住大空軒大教僧家正次作と刻まれています。製作年代についての確証はありませんが、和泉地方での念仏信仰の高まりをみると元禄期の可能性が考えられます。

双盤念仏には各地それぞれの特徴がありますが、当地では多摩山丈尺流だといわれます。丈尺流は應永上人（ほうねんしょうにん）が土佐の国よりの権柄に墨風にあい丈尺の巻に流れ着き、農民と縁を結び念仏を教えたことに始まるといわれているものです。

双盤は上下の盤があり、上盤を打つ者は経巻を巻んだ上で、下盤を打つ者をよく勧修するようになっています。二つの鐘面を伴神（びやくじん）の外



側にあつており、内陣（ないじん）に近い鐘面が上鐘面となります。打ち方については、鐘具（ねつ）に懸架されている音符によると次のようなものです。

まづお仕儀

両面でお念仏を唱えながら鐘を打つ・上座下座と交互に唱えながら数回打つ。

ナーン マイ ダーア と

六十拍 ナナムー アミー ミダーア ブーク
段ガケ ナーン マイー ダーア ア
盆ガケ ナーン マイー ダー ポーオ
しめる ナンマイダーア とくりかえす

韻字は鐘面、六十拍、段ガケ、盆ガケ、しめる、上七、上五、上三、ソツリ、下七、五、三、止三となりその間に合図を入れる。一両れを打つのは約2分程度です。

鐘回しの中で始めはゆっくりした調子で双盤に速くなり、高音から低音に落ちていきます。一節ごとに上座のまねをして下盤が繰り返します。

終わりに近づき、次に鐘をかえるときは、上座の者が一般声を張り上げ、ハアッテンマイダーの声を合図に次に奏ります。

かつては、日が暮れて夜ともなれば、村人が本堂に集まり、夜念仏行事を行なったといわれます。その際には、鐘具が声を聞いて合い奉納したといわれます。双盤念仏も初めは側から教わったものが、在家の人々の間に広がり、近畿列島中環状のために行なうようになったと考えられます。

襖(ふすま)下張り文書の整理作業について

京都府郷土資料館では、江戸時代、小門家の住居を勤めた小門家宗家から襖1枚と桐裏の下張り文書を譲り渡し、そのはがし作業を行なっています。

一般的に襖は図のように、①骨組み②桐裏③裏紙④紙糊⑤紙⑥紙糊⑦紙⑧紙糊⑨紙⑩紙糊⑪紙⑫紙糊⑬紙⑭紙糊⑮紙⑯紙糊⑰紙⑱紙糊⑲紙⑳紙糊㉑紙㉒紙糊㉓紙㉔紙糊㉕紙㉖紙糊㉗紙㉘紙糊㉙紙㉚紙糊㉛紙㉜紙糊㉝紙㉞紙糊㉟紙㊱紙糊㊲紙㊳紙糊㊴紙㊵紙糊㊶紙㊷紙糊㊸紙㊹紙糊㊺紙㊻紙糊㊼紙㊽紙糊㊾紙㊿紙糊の層からなっています。そして、小門家文書の場合は、大抵以下の張り順になっています。

- 第1層 桐紙（貼付状態）が裏向き
- 第2層 桐半紙、唐紙等の桐系の文書が裏向き
- 第3層 桐紙が裏向き（張り合わせが不定順）
- 第4層 桐紙、唐紙（張り合わせが不定順）
- 第5層 泥間紙合紙（どうまにあいがみ）1枚
張り合わせ
- 第6層 同上
- 第7層 大判の桐紙が裏向き
- 第8層 泥間紙合紙が5段に張り合わせ
- 第9層 衣紙、泥間紙合紙に墨絵あり

また、それぞれの襖に張り合わされている下張り文書は、上記のように紙層数が多く使用されています。一般的に襖の下張りに文書を張る場合は、まず、1冊の桐紙を表紙から裏表紙まで1枚1枚順番に張り渡していきます。そして、その層数になった文書を裏の端に合わせて、上部から順番に下部まで切り張りしていきます。そのため、文書の張り順を考慮してはがしていけば、1冊の桐紙を裏元することができます。また、小門家文書の場合は、別々の冊でも同一層に同一の桐紙の文書が使用されていることが多いので、全部の襖をはがし終った段階でかなりの桐紙が裏元できることが期待できます。

次に、襖の解体作業の手順を簡単に説明します。

1 骨格から文書の層をはがす。

木枠をトンカチとコテで裏からはずし、出来るだけ下張りを全層まとめて、竹へらで骨格からはがします。そして、空欄のため、裏とその裏面と裏面に番号を付けて、桐紙にくんで仮保管します。

2 日文書をはがす。

まず、作業台に骨格張りの層を上にして返して



置きます。そして、はがし作業の前に、復元作業を考慮して、文書の張り合わせ状態をスケッチし、文書1枚ごとに番号札を置いていきます。その後、文書全体を裏向きで戻し（桐紙は、戻らずとはがしやすくなります。また、桐紙及び襖は、水に濡れたため、ぬれた文字が滲れたりしません。）、ピンセットで文書の端を持ち上げながら少しずつはがします。

3 はがした文書の保管

はがした文書は番号札と一緒に筒（ろ）紙に挟んで水分を取ります。そして、文書が乾燥したら、1枚ずつ巾着紙にはさんで仮収納します。

以上のような作業のうち、現在目と目を行なっています。そして、この作業は来年年中には終了し、その時点で文書の復元作業を行う予定です。



廣海家文書の整理調査が進められています

本市西町の廣海家は天保9年(1838)に、当時貝塚寺内町を支配していたト平家より譜系別荘を命じられ、「廣海堂太郎」の屋号で、明治以降も別荘屋により繁栄を極めました。当時、土に取り扱った物産は、北海道産のニホン・干鰯(肥料として)、日本海沿岸地方産の魚骨です。同家重ばかりではなく、自ら車船を複数に所有し、各地で直産物産を買い付けて貝塚に再販したり、別の地で売ったりという仲買も行っていました。言わば「総合商社」として活躍したので、

明治の年に持船を売却して別荘屋から撤退した廣海家は、その後も金融や不動産経営により繁栄を続けました。特に鉄道や紡績業等、新興期の東北企業に対して投資を行い、当主自ら貝塚銀行の創設者として役割を果しました。このように、廣海家は貝塚寺内町の経済の中心であったばかりか、明治以降の貝塚・足利の近代化に大きな役割を果たしたのでした。

現在する古文書は、天保期から昭和戦前期にかけての帳簿や書簡など約3万点、古文書保管施設



が約200箱分あります。この中には、穀物や魚骨など取り扱った物産の買い付け先・買い付け高を示す仕切帳、再売げ高を示す通入帳、売却先・売上高を示す売留帳などがあり、これらからは江戸末期から明治期の各年ごとの物産流通全体がつかえるようになります。また、明治期以降の紡績種彦帳や銀行通定帳・株券帳などからは、資本主義経済の確立とその発展の姿が明らかになります。明治経済を就んだ日本の近世・近代経済史・経営史を研究するうえでは、欠くことのできない資料であり、これだけの量をもちものとしては非常に貴重な資料と言えます。

平成4年より、東京大学等の研究者らの協力により整理調査を進めてきましたが、今年度からは関西の研究者を中心に結成された「廣海家文書研究会」に委ねられて、整理調査を行うこととなりました。古文書は全点が市に寄託され、3ヵ年計画でカード化・データ化の作業が始められています。この貴重な歴史資料が学術研究の発展に寄与し、そのことが市民文化の向上につながっていくことを期待いたします。



地域史を掘りおこすとりくみが進められています！

—— 東の歴史と生活を掘りおこす会 ——

「東の歴史と生活を掘りおこす会」は、1979年、地元の小・中学校に勤める人たちによって東地区の歴史と生活の教材づくりを目的として発足しました。その活動の成果は『島村の歴史と生活』（1982年）という本にまとめられ、その後、「村めぐり、町めぐり」（1989年）という冊子をつくり、会の活動は一時中断されていました。

その後、兵庫県教育委員会により編纂家文書の整理が行われ、東地区に関連する江戸時代の資料が約200点存在することがわかりました。これをきっかけとして「掘りおこす会」は、1994年に再編成し再出発することになりました。会員は地元東地区の人たちをはじめ、府内各地から集まっています。

再出発した「掘りおこす会」は、近世史、近現代史、岡き取り蔵に分かれて活動をすすめています。近世史は、東海山大学の藤本浩二郎先生の協力を得て、「編纂家文書」を読み解く作業を行っています。近現代史は、議会議事録の調査や学校関係の資料の収集、分析などをおこなっています。岡き取り蔵は、この間、小学校の先生たちが掘り取った内容を整理しながら、近現代史との共同で新たな岡き取りを行っています。こうした各団体の研究成果は、月1回発行の活動通信に掲載しています。

このような活動の傍に、戦後50年を前に加害と被害の両側から整理した『戦争と東のひとびと』（1999年）という本を発刊しました。また、部属史教育の新たな役割に込めるため、多くの学校の先生方と共に、「『部属史』の見直しとこれからの同和教育」をテーマとしてシンポジウム（2000年）を開催してきました。一方、2007年1月、市営住宅建設に伴う東灘緑地調査で見えられた19世紀の製糖跡地東土城を、「掘りおこす会」や研究者が中心となって、レプリカ（複製）作成（2007年）のとりくみを行ってきました。

現在、これらの活動成果をまとめ、新しい『島村の歴史と生活』誌を発行する準備を進められています。



解放会館3階に、東地区の歴史に関する展示室ができました。

この秋、西宮解放会館の3階に、「東地区の歴史と文化」をテーマにした資料展示室が開設されました。ここでは、東地区の歴史について、中世、近世、岡き取り蔵の3つのコーナーに分け、それぞれ浮城ハルム等が解説しています。中世のコーナーでは、「東の歴史と生活を掘りおこす会」や研究者のみなぶんが中心になって作成した製糖跡地東土城のレプリカを展示しています。今後は別土遺物の展示も行う予定です。どなたでもご覧になれます。お問い合わせは解放会館まで。

水間寺の屋根修復工事中

水間寺は天平年間（729～749）、聖武天皇勅諭により行基が畿内4郡の一つとして開創されたといわれています。また、別に享和元年（798）開基とする説もあります。

当時の水間寺は現在よりも寺域が広く、七堂伽藍を兼ね備えたかなりの規模を持つ寺であったと考えられます。中世以来、頼朝や貴顕、武家の祈禱所として信仰を集めてきましたが、天正10年（1582）豊前守吉の榎本攻めの際に堂塔ごとごとく焼失し、さらに天明4年（1784）には、火災によって本堂が焼失しています。しかしその度に豊前守吉の頼朝の深い保護を受け再建されてきました。

現在の水間寺は本堂が文化8年（1821）に上様式が施こなわれたことが窺い知れるほか、講堂、行基堂、弁天堂、愛染堂などの古式を伝える建物も多く残されています。特に三重塔は大仏殿下で唯一現存する二重塔として有名です。

本陣寺では地元の方々により丁寧に維持、管理がおこなわれてきましたが、近年の過剰な伐り、軒先が壊れるなどの屋根の痛みが目だってきたため、屋根全面の瓦葺き替え工事がおこなわれることになりました。屋根を覆っている瓦を全て取り除き、古い瓦を残しつつ葺き替えをおこなう予定で、瓦を取り除いた際には、奉納が置かれたものや製作者の銘が刻印された瓦も見つかります。奉納工事は現在も続行中で、春には竣工予定です。新しくなった水間寺を見る日ももうすぐです。



編集後記

今年度からテンブスは年2回発行になりました。現代社会誌どではありませんが、私達文化財に関わる人間の身の回りには結構多くの情報があるものです。

より多くの文化財情報を皆様にご紹介し、ご感想を頂きたいと思っています。またお問い合わせもお待ちしております。



かいづか文化財よりテンブス3号

〒520-8611 和歌山県和歌山市
和歌山県教育委員会
〒520 和歌山県和歌山市1丁目1-1
☎ 07341 29-2751
印刷 和歌山県立文化財研究所